



# 自然科学系短期留学生の社会文化系学修 : サバイバル・ジャパニーズを通じた異文化間教育

杉原, 健

---

(Citation)

大學教育研究, 34:211-224

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503434>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503434>



## 自然科学系短期留学生の社会文化系学修 ：サバイバル・ジャパニーズを通じた異文化間教育

Sociocultural Learning for Short-term Incoming Students in Natural Sciences:  
Intercultural Education through Survival Japanese

杉原 健（現・大阪公立大学 国際基幹教育機構 特任講師/  
前・神戸大学 自然科学系工学域 特命助教） / SUGIHARA, Ken

### 要旨

本稿は、自然科学系分野・領域の留学生を対象とした短期受入プログラム内で実施されたサバイバル・ジャパニーズの実践とその教育的効果を参加留学生の声に基づいて検証することを目的とする。約2週間という滞在期間の制約と参加留学生の多様な社会文化的背景を踏まえ、支援設計では即時性と実践性を優先し、日常生活や旅行・観光場面で直接活用できる機能的で頻出度の高い表現の習得を重視した。量的・質的データの双方を収集したアンケート回答の分析から、主に二つの知見が得られた。第一に、現地学生が存在が不可欠であるという点である。共修はコミュニケーション実践を促進するだけでなく、文化的理解を深め、対人関係を育み、学術的な動機付けを支援した。第二に、文法的な説明を最小限に抑えつつ必須表現をシンプルに提供する会話重視型のアプローチは、学習者のニーズと概ね合致し、好意的な評価を得た。その一方で参加者は基礎的な文字（ひらがな、カタカナ、初級漢字）を学ぶ機会や、会話中心の活動に加えて反復練習をさらに行う機会を強く望んでいることが明らかになった。上記の結果は、短期日本語プログラムの質を高めるには、現地学生との体系的な共修機会の拡充と、基礎的な文字学習支援の意図的な統合の両方が必要であることを示している。

### 1. はじめに：プログラムの概要とサバイバル・ジャパニーズの位置付け

大学の世界展開力強化事業や大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業などの始動・展開にともなって、日本の高等教育機関ではこれまで以上に交流学生数を重視した留学プログラムへの注力が見られる。一例として、短期留学生受入プログラムとそれに伴う言語支援実践を本稿では取り上げる。短期的な滞在であっても、学習者が日本社会で一定の自立性をもって生活するためには、初期段階から生活場面に即した日本語運用能力を涵養することが重要である。とりわけ到着直後の心理的負担や文化的ギャップを軽減し、学習者が主体的に日本社会において文化を探索する活動を支えるためには、中長期的な教育や学習支援とは異なる観点からの言語支援が求められる。第4節にて詳述する留

学生受入型共修プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズ実践は、このような課題に対応するための要素として位置づけられる。

短期留学生の背景は多様であり、日本語学習経験、教育歴、文化的背景などに大きな差異がみられる。特に、未学習者と初級段階の学習者が混在する集団に対して、限られた授業時間内で効果的な指導を行うためには、内容選択の精査や活動設計の工夫が不可欠である。短期教育の性質上、文法を体系的に教授するよりも、生活や観光に直結する言語形式や機能的表現への理解・習得が優先される。そのため、本稿で分析するサバイバル・ジャパニーズ実践では、即時性や実用性を重視して支援方針を考案し、学習者が実際の生活行為（本稿においては旅行や観光に重点を置く）を遂行できることを最終的な到達目標として設定した。

筆者が過去に勤務していた神戸大学では、様々な部局における文化交流推進事業として国内大学と海外大学との学生交流を実施していた。とりわけ、本稿で扱うプログラムは、自然科学系の学生（主に学部学生）を対象とした、日本での留学生受入プログラムである。本実践は、神戸大学工学部・工学研究科・システム情報学研究科が実施した短期留学プログラム「Kobe University Engineering Summer School 2024」の一環として、当該部局において本稿の筆者が企画・運営を担当したものである。このプログラムは主に海外学生を受け入れて実施する2週間程度の短期留学プログラムであるが、プログラムの一部には国内学生も参加して共修を展開するフェーズも含まれている。

プログラムに参加する留学生は主にアジア・太平洋地域から募った参加者であったが、それぞれの留学生が有する言語・文化的背景は多様であった。大多数はオーストラリアやタイの大学を主所属とするが、出身地域や日本語学習経験、渡日前の情報アクセス状況などに差異が見られた。また、滞在期間が約2週間と限られていることに加え、参加留学生はプログラム終了後ほどなくしてそれぞれの主所属先である大学へ戻るようになっていたため、長期的な生活者や留学生を想定した学習内容ではなく、短期滞在者が即時的に活用できる表現や行動に重点を置く学習支援が求められた。

この留学生受入に基づく共修プログラムの主眼は自然科学系の学修活動である。具体的には研究室等への見学や学外の公的機関、企業、研究施設等への訪問研修などが含まれる。自然科学系の学修活動以外では、国内学生とのフィールドワーク活動や、PBL型ワークショップでの能動的学修などがあり、本稿で議論するサバイバル・ジャパニーズは後者の学修活動にカテゴライズされる。Kobe University Engineering Summer School 2024は、自然科学系学生を対象とした約2週間の科学技術学修・研修であり、大半の平日は終日講義や実験、研究室への訪問などが組まれていた。平日の一部には学外の研究施設等への訪問学修が配置されているほか、週末には関西近郊への自由探索が推奨されていたため、これらに備える形で平日の朝・昼に日本語セッションを配置した。

表1 プログラム全体のスケジュール

| 行程   |    | プログラム内容                                                     |
|------|----|-------------------------------------------------------------|
| 1日目  | 午後 | 開会式<br>サバイバル・ジャパニーズ①<br>基調講演 A：神戸大学における SDGs の取り組み          |
|      | 午前 | 講義とラボツアー①：機械工学科                                             |
| 2日目  | 午後 | サバイバル・ジャパニーズ②<br>基調講演 B：減災概論                                |
|      | 午前 | 学外訪問研修 A：阪神高速道（株）淀川左岸線延伸工事豊崎工区                              |
| 4日目  | 午前 | サバイバル・ジャパニーズ③                                               |
|      | 午後 | 講義とラボツアー②：建築学科                                              |
| 5日目  | 午前 | サバイバル・ジャパニーズ④<br>講義とラボツアー③：情報知能工学科                          |
|      | 午後 | キャンパスツアー                                                    |
| 6日目  | 午前 | 神戸大学工学部 GCP 生との 1-day フィールドワーク<br>● 神戸市立博物館<br>● 人と防災未来センター |
|      | 午後 |                                                             |
| 7日目  | 午前 | サバイバル・ジャパニーズ⑤<br>講義とラボツアー④：電気電子工学科                          |
|      | 午後 | 学外訪問研修 B：(株) ノーリツ 明石本社工場                                    |
| 8日目  | 午前 | 講義とラボツアー⑤：応用化学科                                             |
|      | 午後 | サバイバル・ジャパニーズ⑥                                               |
| 9日目  | 午前 | 講義とラボツアー⑥：市民工学科                                             |
|      | 午後 | サバイバル・ジャパニーズ⑦                                               |
| 10日目 | 午前 | アイデア創出ワークショップ                                               |
|      | 午後 | アイデア創出ワークショップ<br>閉会式<br>修了証授与                               |

出所：杉原ほか（2025）

本稿は、これらの理念と運営方針のもとで実施されたサバイバル・ジャパニーズ指導について、その設計過程、授業内容、学習者の学習行動および反応の分析を行う。特に、短期集中型プログラムに固有の制約条件を踏まえながら、支援における優先順位の設定方法、教材・活動の構成原理、異文化適応を支援するための工夫などを体系的に整理する。また、授業実践において浮上した課題や改善可能性についても検討し、短期プログラムにおける日本語教育の質的向上に向けた知見を提示することを目的とする。

## 2. 先行研究：サバイバル・ジャパニーズに関する実践の累積と課題

「サバイバル・ジャパニーズ」は日本語を学んだ経験がない、もしくは学習経験はあるものの初級段階である学習者を主な対象とするだけでなく、地域社会における生活者としての日本語学習者が自立的に地域住民とのコミュニケーションをとりながら暮らしていくための日本語学習に含まれる。サバイバル・ジャパニーズにおけるシラバスの必要性和特性を分析した鹿嶋・森（2004：p.37）は、「サバイバル・ジャパニーズとは、「日本で生活する際に、コミュニケーションのために最低限必要な知識および言語として、短期的に教えられたり、使用されたりする日本語」とまとめることができる」と述べている。本稿では、サバイバル・ジャパニーズとは、一義的には短期的に日本で生活するための最低限の日本語や、そういった日本語を教育する／学習する活動を指すものと定義づける。具体的に換言すると、サバイバル・ジャパニーズは、短期滞在者や移住者に必要な社会文化知識を含み、コミュニケーションのための基本的な語彙と文型を学ぶ営みであると解釈できる。

サバイバル・ジャパニーズは様々な文脈で取り入れられ得るため、目的や対象者を異にする実践が各所で発信されている。JICA 研修員のための日本語サバイバルコースの設計と成果を叙述した池田・橋本（2005）は、JICA 技術研修員の口頭運用能力向上を目的として日常生活での日本語使用を支援するための基本的な日本語を教えた実践を共有している。

初期のカリキュラムは内容が多過ぎるために参加者からはネガティブなフィードバックが寄せられやすく、研修員は文法解説に多くの時間を費やし、実践的な練習が不足してしまうという問題点を指摘した上で、各授業を1テーマに絞り、必要な文型・語彙を最小限に設定する工夫などで参加者にニーズにより適切に応えることができる可能性を明らかにした。マレーシア工科大学の学生を対象に筑波大学で行われた日本文化と日本語の短期研修プログラムという文脈に立脚した山本ほか（2018）は「日本文化と言語を短期間で体験させることを目的」として、茶道や書道、かるた会などの文化体験やフィールドワーク活動などを織り交ぜながら実施した5日間のサバイバル・ジャパニーズ活動を概観し、学習者の日本語レベルに関する詳細な情報が必要であることや、日本語母語話者との会話の機会を増やすことが重要であることなどを指摘している。

「サバイバル・ジャパニーズ」と銘打っているプログラム以外にも、初級から中上級レベルまで多様な学習者を対象とした短期集中型日本語学習プログラムとしては、ウクライナ支援のために筑波大学で実施された2022年度夏季集中日本語教育プログラムを報告した小野ほか（2023）がある。日本語教育がウクライナ学生にとっての「居場所」を提供する役割を果たすことに注目したこのプログラムに立脚した小野ほかの検討は、学生のニーズに応じた教育方法が重要であることや教授者自身の言語能力や教育観の向上が要求されることなどを明らかにした。

サバイバル・ジャパニーズは多様な文脈に応じて柔軟に設計されるべき実践領域である。そして、その成功の鍵は、①必要最小限の内容を選定すること、②参加者のニーズを把握

すること、③教室環境外での使用・実践場面を確保すること、④教師側の力量を担保することという4点に集約されることが示されている。一方で、プログラム開始前に学習者の実態を理解することが困難であることや内容選定における基準が不足していること、教師側が受け得る負荷や教師らの能力要件が増大することなどの課題も明らかにされてきている。

サバイバル・ジャパニーズの体系化や実践者を支える仕組みづくりが求められている現状に鑑みて、本稿は自然科学系の短期留学生を対象とした共修プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズ指導の実践から得られた知見を体系的に整理して、浮上した課題や改善可能性を検討することを目的とする。

### 3. 支援設計と実施概要

本プログラムは言語教育と異文化間共修の促進を組み合わせ、短期滞在者が日常生活や観光に必要な基本的な語彙や表現の一部を習得し、自立的に行動できるように設計された。二節にて論じた短期留学生を取り巻く状況を踏まえ、日本語セッションに加え、国内学生が支援する言語的多様性など多層的な支援を組み込んだ点が特徴である。具体的な設計や内容を説明する前に、本プログラムの細かい構成や参加留学生の属性を述べる。

留学生受入に基づく本共修プログラムにはアジア太平洋地域（主にオーストラリアとタイ）の自然科学系学生が参加し、その日本語学習ニーズがサバイバル・ジャパニーズ導入の背景となった。筆者がプログラムの実施委員であった時代はコロナ禍における実渡航をとまなう交流が本格的に再開した時期であり、この受入プログラムは2回開催された。2回とも全体は9～10日間の短期プログラムであり、そのうちサバイバル・ジャパニーズが実施されたのは2回目である。これは、1年目の参加留学生より「日本語に触れる機会が欲しかった」、「日本語を少しでも学んでみたかった」というフィードバックが多く寄せられたことに依拠している。

1年目・2年目ともに、参加した留学生は文化的背景や言語経験が多様であり、出身地域ごとに異なる特徴を有していた。2年目に参加した受入留学生は全部で20名である。過半数はオーストラリアの大学に所属している学生であり、残りはタイの大学に所属している学生であった。オーストラリアの大学から派遣された学生もそれぞれの文化的背景は様々であり、オーストラリアで生まれ育った移民系家族の2世や3世、大学入学と同時にオーストラリアへ来た学生もいた。タイの大学から派遣されてきた学生は、全員がタイでこれまでの人生の大部分を過ごしてきた学生であった。

本プログラムは科学技術に係る学びを主軸として構成されており、その中でサバイバル・ジャパニーズは短時間の補助的セッションとして位置づけられた。コロナ禍前に発足したプログラムを前身としており、コロナ禍後に共修プログラムの枠組みで再編成されて始動した後も運営組織は工学系や情報系などの自然科学系部局であったため、プログラム

の大部分は 2 節にて前述した通り、研究室見学や学外の公的機関、企業、研究施設への訪問研修から構成されている。それに加えて、国内学生とのフィールドワークや PBL 型ワークショップも計画されていたため、サバイバル・ジャパニーズは隙間を縫って朝や昼休み後の時間にウォーミングアップを兼ねて短期集中的に実施することとなった。

サバイバル・ジャパニーズは限られた時間を活用して短期集中的に実施した。全体スケジュールは下記のとおりである。

表 2 サバイバル・ジャパニーズのスケジュール

|   | 概要                                                   | 各回の目標 (Can-do)                                                                                                                                         |
|---|------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | Daily greetings & self-introduction 1                | Can use basic greetings in Japanese<br>Can introduce your name in Japanese<br>Can introduce where you are from in Japanese                             |
| 2 | Daily greetings & self-introduction 2                | Can say how you are doing now in Japanese<br>Can introduce what your hobby is in Japanese                                                              |
| 3 | Weekend plans                                        | Can say where you want to visit this weekend in Japanese<br>Can explain how you will get there in Japanese                                             |
| 4 | Preparation for 1-day fieldtrip                      | Can buy what you want at a shop and restaurant in Japanese<br>Can ask questions to local students in Japanese<br>Can express your feelings in Japanese |
| 5 | Expressing impressions of past events                | Can say what you did last weekend in Japanese<br>Can give brief reflections on past memories in Japanese                                               |
| 6 | Co-learning with local students: language variations | Exposure to Kansai dialect<br>Tandem activity                                                                                                          |
| 7 | Wrapping-up                                          | Quiz activities                                                                                                                                        |

出所：筆者作成

第 1 回から第 4 回まではプログラム 1 週目に実施した。週末を挟んで、第 5 回目以降はプログラム 2 週目に実施した。第 1 回から第 5 回までと第 7 回は各回 30 分であり、第 6 回のみ 1 時間をセッション時間としてプログラム内で確保することができた。

一連のセッションでは、短時間で効果を最大化するため、各回で扱う語彙・表現を厳選し、日常生活で即時に活用できるテーマ別の活動を実施した。各回の内容は上記の表で示している Can-do の通りである。なお、ひらがなやカタカナなど、文字を扱うには時間的制約が厳しかったため、アルファベット表記を用いて音をローマ字で示した。文法につい

てはほとんど扱わず、基本的には語彙・表現をチャンクで教えることを徹底した。留学生から希望が出た場合には、セッション中にいくつか漢字を扱った。

第1回では、「おはようございます Ohayoo (gozaimasu)」や「ありがとうございます Arigatoo (gozaimasu)」などの基本的な挨拶、「わたしはケンです Watashi wa Ken desu」や「にほんからきました Nihon kara kimashita」といった自己紹介を扱った。第2回では、「げんきです Genki desu」や「のどがかわきました Nodo ga kawakimashita」といった体調や気分を伝える表現、「おんがくがすきです Ongaku ga suki desu」といった趣味について話す表現を扱った。第3回では、「ひめじじょうにいきます Himeji jo ni ikimasu」といった週末の予定について話す表現や、「でんしゃでいきます Densha de ikimasu」といった移動方法について話す表現を扱った。これは、第4回終了後に週末があり、学生たちが自由に行動するであろうことを予想したため、プログラム1週目に含めることとした。第4回では、「これください Kore kudasai」や「げんきでおねがいします Genkin de onegai shimasu」といった買い物で使える表現、「これはにほんごでなんですか Kore wa nihongo de nandesuka」や「もういちどゆっくりいってください Moo ichido yukkuri itte kudasai」といった日本語でコミュニケーションを促進する表現を多く扱った。これは、第4回の翌日に国内学生とのフィールドワークが予定されていたため、街での買い物や食事が円滑になることや、国内学生との会話の種になるような表現を多くインプットしておくことを目的としたものである。週末を挟んで第5回では、「あかしやきをたべました Akashi yaki wo tabemashita」や「あつかったです Atsukatta desu」など、週末の経験を話す表現を通じて過去形を文法事項としても部分的に扱った。第6回は趣向を変えて、国内学生との共修を言語学習支援の文脈で取り入れた。共修の機会がフィールドワーク以外には限られていたことから、国内学生からは有志で参加者を募って、大学生活で頻繁に使う表現や地域方言などを互いに教え合うタンデム学習活動を1時間かけて行った。最終回となる第7回では、留学生からの希望もあり、これまでサバイバル・ジャパニーズで扱ってきた内容でクイズ大会を開催した。

本プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズの活動内容は、プログラム全体の時間的制約を踏まえ、最小限の日本語で自立した行動を支えるという方針に基づいて設計した。サバイバル・ジャパニーズの運営は、日本語教師であり、本共修プログラムの運営委員でもあった筆者が担当した。セッションは短時間で理解しやすいことが重要であったため、教材は国際交流基金が発行している「いろどり 生活の日本語」や「まるごと」の入門(A1)を主に参照しながら、該当箇所を抜粋しつつ地名や食べ物の名前などはその地域に合う実例と入れ替えながら扱う形とした。

全7回のセッションのうち最終回では、クイズ大会の後に留学生全員へ向けた無記名式のアンケート調査をオンラインで実施した。次節では、Google Form を用いて実施したそのアンケート調査を通じて寄せられた参加留学生からのフィードバックを量的・質的データに分類して分析した上で統合的に考察することで、本プログラムにおけるサバイバル・

ジャパニーズ実践の成果と課題を検討する。

#### 4. 参加留学生からのフィードバックに基づく分析と考察

サバイバル・ジャパニーズの学習成果および実践に対する学習者の評価を検証するため、プログラム終了時に無記名式のアンケート調査を Google Form を用いて実施した。本調査は、学習者の主観的評価を量的・質的両面から把握することを目的としたものである。具体的には、各項目でリッカート尺度による量的評価項目を設置した上で、選択の理由や所感、フィードバックなどを質的記述で共有できる自由記述欄を設ける構成とした。量的データは、支援の有効性、理解度、活動の適切性に関する全体的な傾向を把握するために収集した。質的データは、学習者が学習成果を認識した具体的な経験や遭遇した困難などをより詳細に明らかにするために収集した。

本節では、上記の量的・質的データから得られた主な特性を整理することで学習者の反応の背景にある要因を検討するとともに、言語学習支援のさらなる改善に向けた示唆を導出することを目的としている。本プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズは「現地学生との共修（言語的多様性を扱った第6回のタンデム学習）」と「担当講師と留学生で行う日本語学習活動（第1回～第5回）」に分けられる。そのため、アンケート結果についてもその2種類に分けて以下で分析する。なお、20名の参加留学生のうち回答者数は18名であるため、回答率は90.0%である。

##### 4.1. 現地学生との共修の不可欠性に関する認識と多面的要因

本項は「現地学生との共修は必要であるか Co-learning with local students is essential. Do you agree or disagree?」という質問に対する参加留学生の意見を、量的および質的な回答データに基づいて分析し、その不可欠性の背景にある多面的な要因を考察することを目的とする。以下に示す回答結果とその分析は、留学生が現地学生との共修に対して非常に強い肯定的な認識を有していることを示している。

「強く反対する」から「強く賛成する」まで5段階のリッカート尺度による回答を集計した結果、回答者全員が共修の不可欠性に賛成していた。具体的には、「Definitely yes, I strongly agree. (強く賛成する)」が約62%、「Yes, I agree. (賛成する)」が約38%を占めており、反対意見は寄せられなかった。この結果は、プログラム参加者にとって現地学生との共修が付加的な要素ではなく自身の留学における必須要素として認識されていることを示していると言える。

共修の不可欠性に対する理由を問う質的データからは、留学プログラムにおける現地学生との共修が有する意義が「文化理解のさらなる深化」、「社会的関係性の構築」、「言語運用能力の涵養」の三つの主要な側面で構成されていることが明らかになった。

最も多く言及された要素は、共修が「文化理解 cultural understanding」に不可欠であるという点である。参加留学生は現地学生との交流を通じて、日本社会における「文化的規範 cultural norms」について、一方向的な情報提供からは得難い「洞察 insight」や「異なる視点 different perspective」を得たという声を寄せた。特に、「文化的な差異と価値観を理解するための素晴らしい方法」であり、「外国人として日本についてより深く知る」ことが可能になるという認識が共有されていた。主なフィードバックは下記のようなものがある。

- Speaking directly to the students was a great way for me to understand cultural differences and values of Japanese
- It helps build not only inter cultural skills but also gives you a perspective and insight into another culture which I believe is essential for a global outlook
- This makes us, foreigners, know much more about Japan including cultures, languages etc.

第二の要因として、共修は高等教育機関における学修成果に加えて、社会的な面においても重要な役割を果たしていることが指摘されている。回答には、「友達を作るため make friends」、「お互いの文化を理解するため understand each other's culture」の機会であるという点が繰り返し強調された。現地学生と「わずかながらでもコミュニティ意識 (sense of community)」を構築できたことが、留学生のプログラムへの適応と満足度を高める上で有効であると解釈できる。主なフィードバックは下記のようなものが挙げられる。

- Generating even a slight sense of community between the international students and native students is an important
- It was nice to interact with Japanese student and get to know them more and know how they think and approach different problems
- They are so friendly and teach us many things outside the class

第三の要因として、日本語の学習と練習の機会としての重要性が挙げられる。「日本語の習得や練習に非常に役立つ」という意見は、教室外での生きた言語実践の場としての共修の意義を示している。加えて、現地学生の「勤労に対する倫理観 (work ethic)」に触れることが留学生自身の「学修への動機付け (motivated to study)」へ繋がったというフィードバックもあった。このことから、共修が異文化間能力の涵養に留まらず、参加留学生自身の主所属先大学における学術的な動機にも影響を与えていることが示唆された。

- It was a great way to learn and practice the language as well as gaining knowledge on cultural norms and good spots to visit locally

- It definitely made me understand how Japanese university students learn and it's motivated to study to the best of my ability. As their work ethic is stronger than Australia and very inspiring.

留学における現地学生との共修の不可欠性に関する分析の結果、現地学生との共修は、プログラム参加留学生にとって非常に重要で不可欠な要素として認識されていることが明らかになった。この不可欠性は、単なる学習機会の提供だけでなく、文化理解の深化、社会的関係性の構築、実践的な言語運用能力の涵養、ひいては学術的な動機付けという多角的な効果に基づいていると言える。短期留学プログラム設計においては、現地学生との共修機会の量自体を確保することに加えて、学生間の対話や多角的な視点の交換を促進する工夫を導入することが、参加者の学習経験の価値を向上させていくために不可欠である。

本実践ではプログラム初期の専門講義の過密日程に加え、学習者の既習事項を考慮し、第6回に共修を配置した。プログラム初期の学習者は挨拶や自己紹介等の基礎的な表現も未習の状態である。そのため、これらに触れた後に共修の場を設けることで、双方向的な交流を学習してきた日本語の実践機会としてもより効果的に活用できるという意図があった。一方で、早期実施は滞在初期の心理的障壁の除去や、その後の国内学生との自発的な交流を促す一助となる可能性もある。今後は、専門研修のスケジュールと調整しつつ、早期導入による教育的効果の最大化は引き続き検討すべきである。本プログラムにおける学生間の対話や多角的な視点の交換を促進する工夫については次項にて詳述する。

#### 4.2. 日本語セッションに対する参加者の関心、評価、および改善提案に関する構造的考察

本項は、短期留学プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズの参加者から得られた4種類の質的データ（関心事、有用性、改善点、全体フィードバック）を総合的に概観した上で分析し、セッションの教育的成果と今後のカリキュラム開発に向けた構造的な示唆を導出することを目的とする。これらのデータは、参加者の学習ニーズが「実用性」と「構造的理解」の二軸で構成されていること、そしてセッションの成功が講師の熱意に強く依存していることを示している。

関心事に関する調査質問 A 「In your stay in Japan so far, what aspects of Japanese (language) were most intriguing to you?」の分析結果は、参加留学生の興味が日本語の実用的な側面と言語的な構造の双方に向けられていることを示している。具体的には、日常生活で応用可能な「実践的な会話・語彙」や「方言（特に関西弁）の地域差」に関心が集まったことが挙げられる。一方で、日本語特有の「文法構造」や「異なる形式 (formalities) の使い分け」といった構造的な側面に強い興味を抱いている参加者の声も多く見られた。この関心は「レストランでの注文」や「旅行で必要となる日常会話」といった実生活に直結するトピックを求める声に強く反映されており、サバイバル・ジャパニーズのような短期的滞在者にと

全ての言語学習ニーズの根幹が実践的なコミュニケーション能力の獲得にあることに裏付けられていると考えられる。主なフィードバックは下記のようなものがある。

- Learning the dialects and general conversations in Japanese have been the most intriguing parts.
- Common phrases to help communicate in various shops.
- Learning about the word structure, and the different formalities and ways of speaking to different people.
- The sentence structure as well as the past, present and future forms of the language. Also the informal Kansai-Ben was very very fun to learn, probably not as useful though

有用性に関する調査質問 B 「What aspects of these sessions did you find particularly helpful or useful?」に対する回答からは、セッションが参加留学生の実用的なニーズに応えることに成功した要因が浮かび上がった。参加留学生は、セッションから得られた「日常生活で実際に使えるフレーズ」(挨拶、注文など)を最も有用であると評価している。教育的なアプローチにおいても、「シンプルで会話的」な設計や「反復練習」、「発音の支援」を重視したセッション設計が、語彙や表現の定着を促進したと参加留学生からは認識されている。さらに、サバイバル・ジャパニーズへのフィードバックに関する調査質問 D 「Please let us know if you have any overall comments, feedback, or suggestions for potential topics you would like to provide based on your learning of Japanese.」で講師に対し「情熱」をもって指導したという極めて高い評価が示されたことから、セッションの成功は、教材の実用性への焦点と、講師によるモチベーションを高める指導スキルに大きく依拠していると結論付けられる。主なフィードバックは下記のようなものが挙げられる。

- Some sentences I can really use in daily life. For example, to say Thank you, Sorry and ask for plastic bag
- The repeating after the teacher segments
- The pronunciation and segmentation so it was easy to learn how to correctly say each phrase and sentence
- It was simple, and phonetic, and conversational
- I think the instructor has done an excellent job and taught us well with passion and excellence.

セッションの改善点を問う調査質問 C 「What aspects of these sessions do you think could be improved?」からは、今後のカリキュラム開発における課題が浮き彫りになった。最も具体的な要望として複数の参加留学生から指摘があった点は「ひらがな、カタカナ、漢字など

の文字学習」である。これは、日本語の構造（質問 A）や漢字学習（質問 D）への関心と連動していると考えられ、会話能力だけでなく、日本語の全体像をより深く理解したいという留学生の意識を表していると読み取れる。また、学習した内容を定着させるために「さらに多くの練習と反復の機会」を求める声も寄せられた。短期間で言語運用能力を効果的に涵養するためには、実践的なアウトプット機会の拡充が不可欠であると認識されている。

本プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズ実践は、参加者から肯定的な評価を得ることに成功した。一方で、セッションのさらなる質的向上と、参加留学生の学習意欲により広く応えるためには、今後のプログラムにおいて、会話中心の現行の強みを維持しつつ、「基礎的な文字学習（ひらがな・カタカナ・初級漢字）」を積極的に組み込む必要がある。この工夫により、参加留学生は日本語を用いたコミュニケーション能力に加え、日本語の構造的な側面への理解を深めることができるため、より包括的で満足度の高い学習経験への仕掛けを施すことが可能となると予想される。

## 5. おわりに：サバイバル・ジャパニーズの展望

本稿は、自然科学系の短期留学生を対象とした共修プログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズ実践について、その設計や実践内容を述べた上で、学習者からのフィードバックを分析することで成果と課題を考察した。本稿におけるサバイバル・ジャパニーズは、即時性と実用性に重きを置き、時間的制約の中で生活場面（本実践においては旅行や観光を含む）に直結する言語運用能力の涵養を目標とした。

分析と考察の結果、本サバイバル・ジャパニーズ実践は、短時間でより大きな効果を得るためのテーマ別の活動設計により、参加留学生の日常生活に即した実践的な日本語ニーズに応えることに成功したと言える。特に、セッションは単純化され、会話的な設計であったことが、学習者から高く評価された要因である。

また、本稿の重要な知見として、短期であっても留学プログラムにおいては現地学生との共修が不可欠な要素として強く認識されることが明らかになった。共修は、単なる言語練習の場に留まらず、文化理解の深化、社会的関係性の構築、ひいては留学生自身の学修への動機付けという多面的な波及効果をもたらしている。短期集中型プログラムの設計においては、現地学生との交流機会を付加的なものでなく、学習経験の価値を高める中核的な要素として位置付け、その量的・質的確保に注力することが有効である。

一方で、今後の質的向上に向けた課題も浮かび上がった。第一に、参加留学生からは、会話フレーズの習得に加え、日本語の構造的な側面への関心に基づき、ひらがなやカタカナ、漢字などの文字学習を求める声が少なからず寄せられた。第二に、学習内容の定着を図るために、さらに多くの練習と反復の機会が期待されている。

本プログラムの主眼は、自然科学系分野の専門研修を主軸とする短期滞在プログラムにおいて、学習リソース（学習時間・対象言語への接触機会）が限定的な受入対象者に対し、

いかに生活・学習・観光基盤としての日本語支援を最適化するかという点にある。人文学系や社会科学系の留学生等に期待される、日本という空間・現象を直接の学修対象とした社会文化系プログラムの設計とは異なり、自然科学系の研究活動に付随する日常生活の維持に機能を絞った設計が本実践の特徴である。また、事後調査で文字学習への強い意欲が見られた点は、専門領域において探究活動に従事する学習者の、未知の言語体系の構成要素に対する知的好奇心の現れと解釈できる。この知見は、専門教育を主目的とする短期留学生受入において、単なるフレーズ暗記に留まらない、学習者の知的背景に即した補助的教育のあり方を示唆している。

これらの課題を踏まえ、サバイバル・ジャパニーズでは会話中心の強みを維持しつつ、基礎的な文字学習をカリキュラムに積極的に織り交ぜることで、より包括的で満足度の高い学習経験を提供することが求められる。また、現地学生との共修においては、学生間の対話や多角的な視点の交換を促進する工夫をさらに導入していくことが、短期留学生へ向けた言語支援の発展における重要な課題である。

## 謝辞

本稿の作成に際し、短期留学生受け入れプログラムにおけるサバイバル・ジャパニーズ実践の実施を許可し、多方面にわたり協力してくださった、かつて筆者が所属していた高等教育機関の関係者に深謝する。また、セッションに熱心に参加するとともに、アンケート調査において貴重な声を寄せてくれた学習者の方々に厚く御礼申し上げる。

## 参考文献

- 池田恵・橋本優香（2005）「交互運用能力の育成を目標としたサバイバルコース：JICA 研修員のためのコース・デザイン」『日本語教育方法研究会誌』第 12 号、pp.48-49.
- 鹿嶋恵・森陽子（2004）「地域在住外国人のための日本語コース・デザイン再考：サバイバル・ジャパニーズとしての短期集中型コースの可能性と課題」三重大学留学生センター『三重大学留学生センター紀要』第 6 号、pp.53-70.
- 小野正樹・加藤由紀子・日暮康晴・薛安捷・陳雨詩・DADAYEVA Maysa・成清萌花・NGUYEN Xuan・Nguyen Hanh・JIN Jin・DADAYEV Esenmyrat・崔智恩・VANBAELEN Ruth（2023）「ウクライナ支援のための 2022 年度夏季集中日本語教育報告：外国語教育の可能性」筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター『グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第 38 号、pp.41-55.
- 杉原健・浅野等・祇園景子・橘伸也・中村匡秀（2025）「防災・減災を志向する異文化間教育：工学系学修と社会文化学修の融合へ向けて」神戸大学大学教育推進機構『大學教育研究』第 33 号、pp.171-188.

山本千波・近藤幸子・吉田麻子・関口美緒 (2018) 「<実践報告> マレーシア工科大学日本文化日本語研修報告：日本文化紹介を目指したサバイバルジャパニーズ学習」筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター『グローバルコミュニケーション教育センター日本語教育論集』第 33 号、pp.103-121.